道会の主張

松村介石

特

投函

特100
526

松村介石著

芝居の主張

天心社發行

270
362

道會の主張

吾黨は一教一派に屬するものにあらず、不朽の道、不易の眞理、即ち古今に亙り、萬國を通じて、動かず變ぜざる宗教倫理の根本義に據り、人をして天に對し、人に對し永遠に對して、自己一身の安立と、責任とを完ふせしめんことを期するものなり。而して其會員たるもの、心得左の如し。

綱領

道會員は左の四綱領を奉ずべき者とす。

一信神　一愛隣　一修德　一永生

信神とは、宇宙の神を信ずるを謂ふ。愛隣とは、人と國家の爲に盡すを謂ふ。修德とは、自己一身の修養を謂ふ。永生とは、人格の不死を謂ふ。

本會と會員

本會は、右の綱領を奉じ、之を行爲に施すもの、團體なり。會員は神を父となし、人類を同胞となし、相互を兄弟姉妹となすの覺悟あるべきものとす。

儀式

入會式、婚儀、葬儀、禮拜式等、凡そ一切の儀式は、國と時代の便宜によりて之を定む。

事業

傳道の外、愛隣の主張を有するものなれば、社會事業にも國家事業にも、一個人若くは團體として、挺身努力することを怠るべからず。

經典

天啓を受けたる神人の教に據りて編纂するものとす。

道と雜信

信神、修德、愛隣、永生、是れ不朽の道にして、不磨の眞理なり。是故に、此の道此の眞理を奉ずる者は、何人たりとも道會員たるを得るものとす。然り而して、此の四個の綱領を奉ずる者たらんには、此の他に如何なる個人的信仰を有するも妨げず。要は、右の四綱領を奉じ、神人交通の靈的經驗即ち心證あるものは、道會員の資格を有するものとす

東京府下荏原郡入新井村字不入斗八三〇　道會假事務所

緒言

道會は明治四十年よりの設立にかゝり、最初一心會と稱して、專ら修養を目的とする團體なりしが、其後日本教會と改め、宗教を根據として、個人の修養并に社會教育に從事することゝなり、遂に本年に至り更に之を道會と改稱したるものとす。

最初は和田倉門外なる商工中學校樓上に於て講演會を開き、其後神田橋畔和强樂堂に移り、今も猶ほ同處に於て我黨の主張を唱道しつゝあるものとす。

日本教會を起すと同時に其機關として、毎月一回『道』なる雜誌を發刊し、更に道の會なるものを設けて、淺草、四ッ谷、芝、麹町、新橋の各所に通俗講演會を開き、其機關として毎月一回『道話』なる雜誌を發行しつゝあるものとす。

道會并に道の會とも何れも數百名の會員を有し、別項に示す如く、已に地方にも及び、續々各地に同信同志者を起しつゝあり。

尙ほ息心調和を唱道する養眞會并に學者貴顯富豪諸君の中にて、我黨に同情せらるゝ方々より成る或る團體とも相呼應し、我國社會の各方面に我主張の發展を計りつゝあるものとす。

因て右等の消息を知らんと欲する諸君は、『道』雜誌并に『道話』を一讀せられんことを、更に又東京府下大森不入斗天心社へ聞合はされたし。

嗟呼時は來れり、今や精神界に大革命を要するの時は來れり、而して吾人の主張と事業と抱負とは本書に掲ぐるものによりて、略々其大要を知ることを得んか、謹んで大方諸君の贊同を祈る。

道會の主張

道と敎

吾人が屢々論ずる如く、諸君は先づ道と敎との區別を知らねばならぬ。「道」とは古昔の人も當今の人も、日本人も、西洋人も、イヤ、亞弗利加の黑奴でも、亞米利加の赤族でも、皆生れながらに知つて居るものである。例へば、詐言を吐いてはならぬ、窃盗してはならぬ、恩義を忘れてはならぬ、愛心や、勇氣や、智惠は慕ふべきものであるが、無慈悲や、臆病や、愚痴は厭ふべきものであると云ふ事などは、萬國萬世の人を通じて、異存のないところ

道會案内

道會講演

（東京市神田橋畔和强樂堂に於て）
（毎日曜午前九時半開會）

道の會講演

淺草區（森田町植木屋に於て毎月一日午后七時開會）
四ッ谷區（傳馬町一丁目四ッ谷倶樂部に於て同十日同刻）
新橋（新橋倶樂部に於て毎月一回日時不定）
麹町區（平河町天神社内公民倶樂部に於て同廿一日同刻）
芝區（三田一丁目春日館に於て同廿六日同刻）
横濱市（伊勢山奬兵議會に於て毎月一回日時不定）

雜誌

『道』毎月一日發行（東京府下大森不入斗　天心社）
『道話』毎月一日發行（東京芝三田一ノ七間島信雄氏方道の會事務所）

地方

須川道會支部（上州利根郡新治村須川町）
名古屋道會（名古屋市小林町）
長府道會支部（長門國長府三井文作氏方）
神戸道會（東川崎町鐵道官舍内中村傳次郎氏聞合せ）
大阪道會（北同心町二丁目青木庄藏氏聞合せ）
濱寺道の會（濱寺公園内石神亨氏聞合せ）
江井ヶ島道の會（兵庫縣明石郡江井ヶ島卜部兵吉氏聞合せ）

である。ソコで道とは普遍普通にして誰も知つて居る、辨へて居る、直に其通り其通りと、頷かざるを得ざる、極めて簡易明白なるものであると云ふことが分る。

然しながら「教」となると左様は行かぬ。例へば釋迦と云ふ印度人が幾千年以前に出て來て、如此事を説いた。更に耶蘇といふ猶太人が出て來て、云々の言を陳べたと云つたところで、直には分らぬ。詐言吐くなと云ふことは生れながらにして知つて居るが、釋迦とか耶蘇とか云ふ事は、人より聞て始めて知るもの、お經や、バイブルは、文字を知つて、始めて讀み得るもの、ソコで是れは「道」ではない、「教」である。

釋迦や耶蘇は何んの爲めに努力したのであるか、人々が此の生れながらにして知て居るものを、遺憾なく行ふて居るならば、法を

説き、教を設くる必要もないのである。然しながら此生れながらにして知て居るものを行はぬ、此心に在る法律を守らない。ソコで階級制度を拵へたり、破戒僞善の徒を出して、世を濫し、自己を苦しめて居るから、之を可愛想に思召して、其の生れながらにして知つて居るもの、卽ち「道」を行はしめて、之を安立の地に置きたいとの慈悲心より、こゝに「教」を設けられたのである。是故に「道」は天より出たもの、教は人より出たもの、道は不朽不易不磨のもの、教は時と處とによりて廢るべきもの、變ずべきものである。

ソコで儒教を見給へ、仁義五常や、智仁勇の三德などは、「道」であるから易るものでないが、其の教方に就ては、今日に通用しないものが頗る多い、卽ち「民をして由らしむべし知らしむべから

ず」と云ふ文句の如きは、最早や立憲政體の今日には通用せぬ。又た「女子と小人とは養ひ難し」とある如きも、婦人の位地を以て、文明の程度を量る今日に於ては頗る異存のあることゝ思ふ。更に釋迦なり、耶蘇なり、孰れも其時代時代の人民に向ふて、應病投藥の法を施したのであるから、之を今日に說くことゝすると、小供の衣物を大人に着せる樣な、可笑しな滑稽を演ぜねばならぬ樣な事になつて來るのである。

之を要するに「道」とは直に成程と分るものである。敎とは此道を行はしむる爲めに、設けたる方便に過ぎざれば、分ることもあり、分らぬこともあり、今日に適するものもあり、今日に適せぬものもあるから、吾人は此の不朽、不易、不磨の『大道』を本尊とし、釋迦や、耶蘇や、孔子の說いた敎を參考とし、而して日本

は日本、支那は支那、西洋は西洋、東洋は東洋の風俗と國體に應じて、其々今日に適する敎を樹てねばならぬと主張するのである。

團體

道會は一敎一派に屬するものにあらず、不朽の道、不易の眞理、卽ち古今に亘り、萬國を通じて、動かず變ぜざる宗敎倫理の根本義に據り、會員をして天に對し、人に對し、永遠に對して、自己一身の安立と、責任とを完ふせしめんことを期するものなり。乃ちこゝに團體あり。

前述の如く、詐言を吐くな、窃盗を爲すなと云ふことは「道」である。然し其れは道の一部で、道は天地に通じ、萬物に溢れて居て、而して一ッの心に歸着するものである。吾人は之を説明して見たいが説明することが出來ぬ、卽ち説明することは出來ないが、然し言語以上に之を知り、之を自覺し、之を味ふて居るのである。ソコデ此一心より云ふときは、釋迦も入らず、孔子も入らず、耶蘇も入らず、お經も入らず、バイブルも入らず、四書五經も入らず、敎會も入らず、儀式も入らず、信仰箇條も入らず、入會式も入らず、一切の形式形體は無用なのである、而して已に形體を取て、現はれ來るときには、必ず弊害が之れに伴ふて、必ず俗殺せらるゝに極つて居る。是故に實を言ふならば、此一心で合體して吳るれば、此上もないのであるが、其れが凡俗には出來ぬから、

其れで敎會や、信條や、經典や、儀式が必要になつて來るのである。孔子でも、釋迦でも、耶蘇でも、つまるところ此一心を説き、我道一以て之を貫くとか、無くてならぬものは一のみとか、一心萬象とか謂ふては居るが、さて其れが世に出るに當ては、矢張り形式を帶びねばならぬから、さてこそ宗門ともなり、敎會ともなり、寺院ともなつたのである。

左れば吾人も此一心の極意を知らぬのでないが、幽靈では仕事が出來ぬ、此世の濟度が出來ぬから、是非とも玆に敎會をも結び、信條をも設け、儀式をも拵へる必要があるから、卽ち道會なる團體を起したのである。

綱領

道會員は左の綱領を奉ずべき者とす

信神。　修德。　愛隣。　永生。

信神とは、宇宙の神を信ずるを謂ふ、修德とは自己一身の修養を謂ふ。愛隣とは、人と國家の爲に盡すを謂ふ。永生とは、靈魂の不死を謂ふ

信神、修德、愛隣、永生と謂ふ四綱領は、矢張り説明せねば分らぬから「道」ではなく、「敎」である。而して已に敎であるから、是非とも此れでなければならぬと謂ふのではなく、何樣に變へても可いのである。然し先づ今日に説くところにては、此れが簡明

にして且つ其要を得て居ると思ふのである。敢て各宗敎の眞髓を拔て拵へたと云ふのでもなく、又た其説明に於ても敢て各宗敎の敎理を折衷したのでもないが、一般の人間をして彼の天地之心を奉ぜしめんには、此四綱領位で宜しと思ふ。而して此四綱領の説明は本文の如くであるが、此れとても敢て此文字に限ると謂ふのでもない。例へば此神なる語とても敢て之れに泥する必要なし、印度に入ては佛ともなり、支那に入ては上帝ともなり、歐米に入ては、ゴッドともなつて現はるべきものである。又た修德とても、支那に行けば支那、印度に行けば印度、英米に行けばセルフカルチュアーとでもなるべく、更に愛隣の語はバイブルより出で居るのであるが、支那に行ば仁となり、佛敎國に行ば慈悲となり、各國に行けば又た各國其々の文字ともなつて現はるべく、永生とて

も亦た同じく然りであつて、決して此の文字や四條に執着するのではないが、然し已に一敎會を結んだ以上は、茲に全會員を統一する信條が無くてならぬから、卽ち簡明にして要領を得たる四綱領となつて現はれて來たのである。

道會と會員

道會は、右の信條を奉じ、之を行爲に施すものの團體なり、會員は神を父となし、人類を同胞となし、相互を兄弟姉妹となすの覺悟あるべきものとす。

神を父とし人類を同胞とし、相互を兄弟姉妹と爲すとの言を見て餘り基督敎の文字を用ひ過ぎたりと謂ふものあり、如何にも然らん。元來我輩は始め儒敎に養はれ、其後久しく基督敎會に在りしものとす。是故に往々耶蘇臭きところあるを免かれず、否、已に日本敎會(道會の舊名)を起せしも、最初の程は、全く耶蘇敎的であつたのである。然に只だ〳〵靈と眞とに導かれて進んで居たところ、追々耶蘇敎臭味が厭氣になり、今日に於ては、全く耶蘇敎の範圍を脫出した樣であるが、而かもまだ曩時に定めたる文字を改むるに至らぬのであるから、趣旨が同じ事で、日本人に解り易き此の外の文字があるなら、之に替へても可いのである。其は兎も角も、天地の化育に參して居る我々は、此の化育の本源を拜して父の如く心得、我々相互を兄弟姉妹と見做して生活すべきこと

は、實に人類の大道であつて、此教理より起る人類間の祝福は實に無量であると信ずるのである。

儀式

入會式、婚儀、葬儀、禮拜式等、凡そ一切の儀式は、國と時代の便宜によりて之を定む。

道會の主張で見ると、バイブルばかりでなく、中庸も、法華經も、同じ事であるから、說教前に色々の書を讀んだり、全く何んにも讀まなかつたりして居る。祈禱も亦然りで、最初は必ず說教者が聲を發して祈禱したが、今は會衆と諸共に數分間靜座默禱する樣にして居る。尙ほ今後如何なる禮樂を用ゆべきか、何か禮拜の目標を定むべきか、會員の家には神座と祖先座を置ては如何など、考案中で、一切の儀式はまだ〳〵未定であるが、之れも國と時代に依て適切なものを設けて可いと云ふ事と、宗教には兎も角も儀式と禮樂の必要があると云ふ事丈は定つて居るのである。

事業

傳道の外、愛隣の主張を有するものなれば、國家事業にも、社會事業にも、一個人若くは團體として、挺身努力することを怠るべからず。

山に入て念佛三昧に耽つて居るばかりでは不可ぬ、高く人類や倫理を超越したつもりで、一向社會に關係なき人間となつて仕舞ふのは、我黨より見れば外道である。是故に我黨は何處までも人を離れず、國家を離れず、世界を離れず、政治界でも、實業界でも、凡そ世上百般の人事に盡し、各社會の人をして、皆各々其靈性を養ひ、時處位に應じて人の人たる本分を盡さしめねばならぬと主張するのである。

經典

天啓を受けたる神人の教に據りて編纂するものとす。

經典は必ずしも必要でない、釋迦の生時には、經典なるものが無かつた、耶蘇の死後六七十年の間には、新約聖書なるものが無かつた。是故に逐次の發展につれて、經典樣のものが出來るかも知れぬ、又た彼の天地の心にのみ合體する我等には、天地萬物が經典であるから、敢て其必要を感せぬが、是れも亦た世上一般の人の爲めに、何か依るべきものがありたく思ふのである。

道と雜信

信神、修德、愛隣、永生、是れ不朽の道にして不磨の眞理なり。是故に、此の道此の眞理を奉

ずる者は、何人たりとも道會員たるを得るものとす。然り而して此の四綱領を奉ずる者たらんには、此の他に如何なる個人的信仰を有するも妨げず。要は、右の四條を奉じ、神の恩寵に預かり居る靈的經驗卽ち心證あるものは、道會員の資格を有するものとす。

漠然「道」を信ぜよ「道」に率へよと云つたところでは、宗敎にならぬ、何か本尊がなくてはならぬ、お祖師樣がなくてはならぬと云ふ人もあるが、ソンナ議論は別物として、實際理屈でなく、議論でなく、眞に宗敎的心證を持て居るや否やが、吾人の問ふべき問題である。其所謂る「道」丈では宗敎にならぬとかイヤ佛法

は什麽の基督敎は恁麽のと立派に講釋する人で、サッパリ宗敎的自覺を持て居ない人が多くある。故に吾人は更に理屈を謂はぬ、何んでも構はぬ、眞に神を信じて感謝して居るか什麽か、實際に德を修めて、日々人格を向上せしめつゝあるか什麽か、眞に隣を愛する心を以て、人々に善事を施しつゝあるか什麽か、更に永生を信じて常に感謝の生活を送りつゝあるか什麽か、問ふべきは是れである。吾人は議論を好まず、總て實際を問ふのである。

傳道の方針

道會の主張は、大抵前述の次第にて、分明なりと信ず、因て之れより少しく其の應用に就て、說て見たいと思ふ。

凡そ吾人が傳道すべき人に三種がある。第一は已に其道を得て居る人、第二は現に其道を求めつゝある人、第三は更に其道に氣着かざる人、卽ち是れである。

吾人は第一の人に向ふて謂ふ、諸君は牧師であるか、僧侶であるか、儒者であるか、神官であるか、學者であるか、實業家であるか、其孰れにもせよ、諸君の說くところは、吾人の所謂る「大道卽四綱領」に歸するより外はないのであるから、諸君と吾人とは、實際同宗敎に屬するものである。是故に吾人は諸君を指して、異端の人とも、邪說の人とも、謂はない、然し問ひ度は、單に其等を說くばかりでなく、眞に其道を體得して居らるゝや否やである、而して已に其道を體得して居らるゝとの事であらば、吾人は最早や諸君に道を講じ、敎を說くの必要を見ない。

ソコデ今日お互の相談は、「如何なるを之れ道と謂ふや」ではなく、「如何にせば、斯道を今日の世に最も能く傳へ得べきや」との問題である。諸君は基督敎若くは佛敎、若くは神道で之を得たのである、然し基督敎では此四條の外に耶蘇を聖靈にて孕みたる神の子であるとか、十字架で購はれねば罪が赦されぬとか、バイブルは謬りなき神の默示であるとか云ふ樣な解り惡い事を說て、一寸合點が出來惡い。佛敎は又た佛敎で、面倒臭い說法を並べねばならず、儒敎は却々普通には行はれ難く、神道は未だ世を說服し行くまでに發達し居らぬ。さらば從來は從來の事として、今日では、諸君の得て居らるゝ其道を傳るに、最も簡明にして最も効能ある法に出で、此の無宗敎に陷りつゝある世の中を救はねばならぬではないかと、諸君に御相談を打掛け、我道會では、此四綱領で以

て其目的を達し得ることを事實に照して確信するが故に、一ッ吾黨に加りて今日の此世を救ふではないかと相談するのである。一言にて之を謂はゞ、第一の人に對しては、最早や道を說くの必要がないが、其道を傳へるに當り、道會の主張が、最も今日の世に適切なりと信ずるが故に、一ッ此の方法に一致し、同會員となつて働て下さらぬか、否、一處に行らふではないかと相談して見たいのである。

第二の人に對しては、斯く謂はんと欲するのである。諸君は今や安立の地を得ず、其道を求めて彷徨す、然れども道は敎會にもなく、寺院にもなく、神社にもなく、漢學の塾にもあるものではなく、唯夫れ君の心の中に在るのである。諸君は何か知らぬものでも尋ぬる如く、目を張り耳を飛ばせて、四方八方を駈け廻て居るが、皆見當を誤て居るのである。ソレ道は已に云ふが如く、生れながらにして知て居るもの、之を人に問ふには及ばぬものである、尤も之を知るも行ふ能はず、行ふ能はざるが故に、安心を得ず、安心を得ざるが故に、其道を行ひ得る敎法を求めつゝあるのであるが、之を今日迄の宗敎に求むるのは無理である、今日迄の宗敎は、往古の人には適したが、最早や今日の人には適しない、譯の解らぬ神學や、七面倒のお經の文句や、無意味の宣詞や、字典と首引せねば分らぬ樣な古い書物の敎は、到底今日の諸君を滿足せしめ得るものではない。因て先づ道會の主張に從ひ給へよ、必ずや「天命之を性と謂ふ」ところも、「天國は汝の中に在り」と謂へる意味も「見性成佛」の奥義も、皆一朝に合點し來て、直に神魂の救はるゝ人となるに相違ないからと。

又た第三の人に對しては、卽ち斯く云ひたいのである。諸君は道とか敎とか、宗敎とか道德とかを說く人に向ふて、ア、蒼蠅い、今少し暇が出來たら、聽きませふと云ふ、而して宗敎が一向其身の利害に關係なきものゝ如く心得て居る。然し心膽が据らずして、始終悸々することがあるではないか、邪慳の角を立てゝ其身を刺すこともあるではないか、更に煩惱の犬に遂はるゝこともあり、虛榮の猿に操らるゝこともあるではないか、尙ほ又た生老病死の境涯を通じて、此一生を送る間には、悲しき事にも、憂き事にも、恥かしきことにも、情けなきことにも、忌々しきことにも出で會ふに相違ないが、其時に當りて此宗敎心あるものと、此宗敎心なきものとの懸隔如何に想到せられたることはないのであるか。吾人は利害を目的として宗敎を說くものではない、然し利害の鋭き

諸君にして此懸隔を度外視するとは何事ぞ。更に積極的に之を云ふならば、世に愉快の事尠しとせず、然れども精神的の愉快ほど、高尙にして而かも無限的のものは無いのである。若夫れ宗敎的の人に於ては、天上の月も、地上の花も、亦た一層の眺を呈し、忠孝の心も、愛國の情も、亦た自ら聖化し來り、百難に臨んで寂然動かず、萬誘に遭ふて虛靈昧まず、修養上には野より大妙に至るの訣を學び、宗敎上には、神人合一の堂奧に入り、人を救ひ、世を益し、其の何人たるを問はず、到るところに神佛の御名代を勤むる其愉快は、實に不潔なる肉慾や、卑俗なる虛榮に耽つて居る豚や孔雀の樣な人の窺ひ知ることの出來ぬものである、否、たとひソコまでには至らずとも、日夜天地に感謝して、此世を送りつゝある生涯のみでも、如何ばかりの幸福ぞや、而して是れ皆宗

教なきものゝ與り知らざるところである。
ア、吾人は尙ほ〳〵、各階級の人に向ふて語りたき事の多くある、
而かも今は先づ此三種の人に向ふてのみ說き置くべし。

宗教とは何んぞや

ハイ　私は無宗教で御座ります、一向宗教心の無きもので御座りますと云ふて、其實非常なる宗教家である人が幾らもある。否、大抵の人は皆其れ相應に、一種の宗教を持て居るが、唯だ之を自覺して居ないまでゝある。成程耶蘇教の說く樣な神や、佛教の說く樣な佛は信じて居まい、然し何かと云ふと、ア、あれは天罰であるとか、因果は恐ろしいものであるとか謂て居る、而して更に

何んだか天地の作用、若くは人生の運命に對して、一種の不思議觀を抱て居る。是れ軈て無意識的に吾人の所謂る信神の部類に入るべき人である。敢て聖賢の教を聽たのでも、讀んだのでもないが、然しあれは義でないとか、人情に違ふとか云ふて爭ふて居る、卽ち何處かに善惡邪正の存在を認めて居るのであつて、吾人の所謂る修德の義も、平生彼等の唱へて居る中にあるのである。更に又た其愛隣に就ても、旅は道伴、世は情とか、渡る世界に鬼は無しとか、あれも人の子樽拾ひとか、若くは難有人であるとか、憐み深い人であるとか云ふて、稱めて居て、而して皆孰れも無慈悲の人を罵て居る、是れ皆世は我黨の主張に贊同して居る證據でないか。更に我永生に就ても、イヤ一向私には未來を信ずることが出來ませぬとか、死んで後の事はどうでもよいとか謂ふが、

然し死んとする樣な病氣にでもなつて見よ、友人の死にでも會ふて見よ、否、人間は今夜も知れぬものである、早いか晩いか必ず皆白骨に歸するものであると云ふ樣な眞面目なる人生問題に觸れて見よ、大學者ミルでなくとも、直に一種の宗敎觀に打たれるに相違ない。

之を要するに宗敎とは、月花に對して其美を味ひ、天地に對して其不思議を感じ、己れに對して其來るところと往くところとを尋ぬる心である。義を見て起ち、善を聽て拜する心である。人と國とを愛して其身を捧ぐる心である。造物主に對し、恩人に對して、其德に報ぜんと欲する心である、而して永遠に對して常に希望を抱て居る心である。敢て形式の耶蘇敎や佛敎や神道を信じなくとも、此心あるもの、是れ皆宗敎家で、少くとも我黨に屬する宗敎家である。

道會の起りたる理由

其一、今や多數の宗敎がある、而して各々門を設け派を開き、我敎でなければ救はれずと說き、互に爭ふて人心を亂す。是故に諸敎歸一の大道を示して、之を四綱領の下に統一したいからである。

其二、現今の宗敎は千年若くは二千年も以前の未開時代に出來たものである、是故に最早や今日には必要でない色々の敎義を含んで居て、迚も今日の世には適しない。ソコで道は萬古不易なる者であるも、敎は時と處に從て改めねばならぬと考へ、こゝに一宗敎團體を起す必要を感じたからである。

其三、若しも宗教の勢力と其感化とが、十分に我國の今日に存在するならば、暫く之れに任せてもよいのであるが、諸教共に皆維新革命の餘波と、學術の影響と、東西兩洋の不調和とに因て攪亂せられ、威權を以て世道人心を圧すに足らぬものとなつて居る。故に此際何人も「否」と云ふ能はざる道即天命を以て之を既倒に回したいと思ふからである。而して將來の宗教は、日本にても、支那にても、西洋にても、皆此の道即天命を根據とする宗教でなければならぬと信ずるからである。

其四、日本今日の通患は、研究とか、調査とか、學術とか、組織とか稱へて、其方法や制度ばかりを考へ、一向精神的方面を顧みず、教育も政治も、否、宗教までも皆機械的となつて仕舞ひ、何事も枯骨の化物ばかりで行て居るが、斯う云ふことでは、たとへ各地に青年會を起すも、報德會を拵へるも、否、濟生會の如き結構なる美擧を企つるも、皆お役目御苦勞的で、血のない熱のない、事務員にのみ取扱はるゝこととなつて仕舞ひ、日本は美服を着ながら、凍死するに相違ないが、此通患を救ふには、是非とも宗教的狂熱と其の活動に俟ねばならぬ、即ち道會の起るのも亦た之れが爲めである。

其五、勿論人さへあらば、學校教育でも、社會教育でも、隨分人心を改むることが出來る、然し人には物を隱すことが出來る、又た互に譎すことが出來る、ソコで宗教を說き、神を說き、天命を說き、之を隱すことの出來ぬもの、譎すことの出來ぬもの、即ち晝夜我れの內外を監視し給ふ『彼』に結び附けねば、本當の人心教育は六ケ敷のである。更に又た上に威張るものゝ頭を抑へ、下に

虐げらるゝものゝ心を慰むるものは、教育でなくして宗教である
から、最も今日の世に之を鼓吹せねばならぬと感ずるからであ
る。

其六、更に眼を擧て見よ、世は文明と謂ひ、進歩と謂ふも、人生の祝福は、却て減却しつゝあるにあらずや、梅花は汽車の煙を帶びて泣き、名勝は俗物の庭となつて悲しむ、美神は多く不風流の人の手に弄せられ、光風霽月亦た將に價格を附せられんとす、於茲乎古來より人心を清めたり、又た之を高めつゝありし諸要素が、今や絶えなんとしつゝあるのである。更に又た人情界に入て之を見れば、大家の奥に毒蛇住ひ、自働車の中に惡鬼坐し、富めるものは、益々富んで滿足せず、貧きものは怨嗟の上に怨嗟を重ね、將に暴虎の擧に出でんとし、日本の前途には危險横はる、此れ道會の起らざるを得ざるゆゑんである。

左らば來れ、同信同志の諸君よ、來りて共に與に吾人の大業を成就せしめよ。

祖師なき宗教

お祖師樣のなき宗教は成り立たぬ。佛國革命時代に、或人が一世那翁に新宗教の考案を、提出したところが、那翁が笑ふて、其れはダメ、但し君が十字架に就き、其上復活したならば、或は其宗教が成立するかも知れぬと答へたと云ふことである。我國維新の際にも、大隈と伊藤の兩政治家が、年少氣鋭に任せて、新宗教を組織せんとしたるも、中村敬宇さんに叱られて廢めて仕舞つたと

云ふことを、大隈伯其人から聞いた。宗教は成長するものであつて、製造せらるゝものでない。今日佛を借り、儒を賴み、耶を傭ひ、神を買ふて、理想的宗教を起さんと主張したところで、其れが物になるものでない。滑稽の極である、茶番である、識者の一顧にだも値しないなんどゝ云ふ樣な事は、最早や舊い舊い言ひ草となつた。

其證據には、我黨がこゝに道會を起して、我黨は基督教にもあらず、佛教にもあらず、其他何教何派に屬するものにもあらず、不朽の道、不磨の眞理、卽ち信神、修德、愛隣、永生の四綱領を提げて、こゝに活宗教活道德を鼓吹するものなりと表白すると、世人も友人も初めのほどは、皆笑ふて之れに對し、殆んど齒牙にだも掛けなかつたのである。然るに不思議な事には、我黨の傳道

の結果として、續々神を信じ、德を修め、人を愛し、永生を自覺するところの會員が加はり來り、佛教者の如く、又た基督教者の如く、否、或は其れ以上に宗教道德の眞髓を獲得するもの〻多く起ることが、實際の事實となつて現はれ來たではないか。

しかし、此れは不思議でも何んでもないのである。實を云へば時勢の變遷と云ふものは妙なもので、文明の進歩と、學問の結果として、お祖師樣的宗教は、最早や時勢晩れとなつたのである。耶蘇は處女より生れた神であると信じられて居たところが、聖書研究の結果として、左樣ではなく、矢張りヨセフの子であると云ふことが分つて仕舞つたり、十字架の贖罪說が、耶蘇本來の教ではなく、保羅が自製の神學であると知れ、聖書の權威が無みせられて、耶蘇の缺點が指摘せらるゝ樣になつては、耶蘇を神とするお

祖師様的宗教は持續せぬ。釋迦とても同じ事で、此れも小乘佛教のみの教師と知れ、大乘佛教は其後に生れたものと定つて見ると、以前の様に難有くなくなつて來た。殊に耶蘇の說いたことにも、釋迦の說いたことにも今日にては信ぜられもせねば、用ゐられもせぬものが隨分あると分つて見れば、お祖師様の威光も、次第々々に減ぜらるゝ形である。其れのみならず、よく〳〵詮索して見ると、一體自身が、神とか、佛とか稱へられて、無暗に崇拜せらるゝのは、耶蘇や釋迦の本意ではない。耶蘇は己れを拜して『善き師よ』と呼ぶものに向ひ、『善き師とは誰れぞ、神より外に善きものはなし』と叱り附けて、己れを神と均しくすることを避けたのである。釋迦とても難業苦業して、漸く悟を開たものである。而して耶蘇でも釋迦でも、今日の文明を知らなかつたのである。

左ればソンナに、神其物とか佛其物とか稱すべきものではなく、矢張り糞袋を抱て居た人間であつて、後世より想像するほどのもので無いに極つて居る。ソコで已に左様と極つて來ると、お祖師様も其幅が利なくなり、其權威も衰へ來りて、從來の宗教に大動搖を來すに極つて居るから、豫め之れが覺悟を爲さねばならぬのである。否、已に其時勢となつて來たから、最早やお祖師様を戴く從來の宗教では、今日の人心を繫ぐことが出來ず、從つて東西兩洋ともに、懷疑と不信仰の暗黑界に沈みつゝあるのである。そこで我黨は敢てお祖師様を放擲せよと謂ふでないが、少くとも其のお祖師様等の說かれたる本來の教旨に歸れよと謂ふのである。耶蘇は前述の如く、己れを神として拜めよとは教へず、却て之を避けたのである。釋迦とても己れが佛其物であるから、我を拜め

よとは謂ふたのでない。兩人ともに我れは人である、拜むべきものでない。拜むべきものは、彼れ神である彼れ佛であると、己れ以上のものを指したのである。然るに如何なる莫迦ものぞ、其指さした物を見ずして、反て指其物を見、指其物を拜む樣になつたのである。左れば今日は本來の敎旨に戻りて、指其物よりも指其物の差し示した神若くは佛を拜み、只だ之れにのみ事ふべきなのである。お祖師樣とても、今日は拜まれて、却て迷惑せられて居るに相違ない。お祖師樣を尊むのはよいが、お祖師樣の敎旨に悖てはならぬ。

於此乎、我道會の主張は寔に分明になるであらふ。凡てのお祖師樣を無みするのではなく、お祖師樣の源敎に戻れよと謂ふのである。卽ちお祖師樣を拜まずして、直に神若くは佛其物を拜めと謂ふのである。而して神とか佛とか稱へて、其名を異にするも、詮ずるところは、實在の一物であるから、之を拜し、之に接し、之れに事へて、己れも亦た耶蘇や釋迦と同じ樣に、漸く神佛に化せよと謂ふのである。一言にて之を云はゞ、耶蘇や釋迦等は、神でもなく、佛でもなく、我等と同じ人間で、隨分缺點もあり、未熟のところもあつたのであるから、無理に之を完全のものとせず、又た其遺したる言說に束縛せられず、彼れは先進者であり、我れは後進者であるが、神の前には皆同門であるから、彼等をお祖師樣とするの必要もなく、却て今日は社會が進んで來て居るから、其人格に於ても、其說法に於ても彼等の上に出でねばならぬと主張するのである。

嗟呼誰れか謂ふ、お祖師樣なき宗敎はダメであると、否々、今日

はお祖師様に束縛せらるゝ宗教こそ、ダメになつたのである。學問の結果と、文明の進歩の爲めに、既成の宗教は、其根底を喪ふたのである。而して論より證據には、現に我黨がお祖師様に依らずして、立派な宗教心を懷き、之を世に宣傳するに、所在皆之に麾くの勢に徴しても分るでないか。イヤ實を云へば、今日は耶蘇教者でも、佛教者でも、最早や古來より傳はる種々の教理を信ぜず、詮ずるところは、我道會の主張する四綱領即ち宗教の眞髄のみを信ずる樣になつて居るのであるから、呼べば忽ち應じ來るのである。又た無宗教の人でも、我が主張を聽くと、其れならば分る。從來の說法では腑に落ちぬが、其れならば分る。聞て直ぐに承知が出來ると云ひ、而して我黨の悟道を之れに說けば、豁然として安心立命の眼を開く樣であるから、我れながら時勢の要求に驚いて居るのである。新宗教か、舊宗教か、我れ之を知らず。製造か成長か、我れ亦た之を知らず。祖師あるか祖師なきか、我れ亦た之を爭はず。否、我黨は議論を好まず、唯だ實際に試みて之れが成敗を視んと欲するのである。而して着々其實績を擧げつゝあるのである。

道會員の資格

道會員は四綱領を奉じて相結ぶ。是故に其資格に於ても、亦た四綱領に從ふて說かざるべからず。第一には信神なり、道會は國家を論じ、社會を說き、道德を述べ、倫理を講じ、嘗て純宗教に及ぶなし。即ち講演のみ多くして、說教らしきもの極めて尠なし。

此れでは宗教團體たる能はず。畢に社會的事業の一運動となりて終るべし。且つや宗教には必ず一定の儀式あらざるべからず、然るに道會は之を有せず、和强樂堂に行て之を見よ、唯だそれ數分間の靜座あるのみ、音樂なく、唱歌なく、禮拜なく、讀經なし、豈之を宗教と謂ふべけんや。其主張には之れあるも、其實際には之れあるを見ず、之を宗教團體と謂ふべきか、將た其自稱の如く活宗教を傳へ居るものと謂ふべきかと。然り、然り、其論一々尤もなり。吾人之を知らざるにあらず、未だ其道具の整はざるを奈何せん、卽ち先づ宗教的會堂を有せざること是れなり。諸君は說教と云ひ、禮拜と云ふ、而かも和强樂堂の如き場所と建築物に於ては、其等は到底不可能事に屬す、短褐は祭儀に適せず、陋巷には紫衣を曳くべからず、吾人の說くところに純宗教のものなきにあらず、而かも其有難く聽へざる所以のものは、場處之をして然らしむるなり。且つ其の宗式の如きは、今や實に考案中に屬す、よろしく其時を待つべきなり。ポーロがマセドニヤの野に叫びしとき、日蓮が辻說法を始めしとき、何れに宗式なるものありしぞ、唯夫れ言論ありしのみ、諸君何ぞ性急なる。諸君の謂ふところ吾人之れを知らざるにあらず、知るも尙ほ之を實にすべき時を有せざるのみ、大廟を拜すれば感涙下り、深山に入れば莊嚴を覺ふ、氣は境遇に從て轉じ、心は周圍の如何に化せらる。さらば見よ、不日必ず諸君の前に、羅馬教會若くば法華宗の如き大儀式を示すべき時あることを。其れ然り然れども實を云はゞ、儀式によらずんば、其の心を養ふ能はざるものゝ如きは、未だ幼稚なる信者のみ。神は靈なれば拜するものも亦た靈を以て拜すべきのみ、何ぞ

儀式を須んや、何んぞ禮拜を要せんや。諸君は自ら輕んずることなく、行人を山木に擬し、塵埃を香煙と心得、四肢を去り、五體を離れ、瞑目一番、直に第三の天に登るべきのみ。宗教の眞味は、説くべからず、聞くべからず、唯夫れ自己の靈的經驗に由るべきのみ、諸君にして已に之れあるか、何んぞ宗式を喋々せんや。諸君にして未だ之れ無きか、たとひ宗式を喋々するも、畢に門外漢たるを免れず。故に吾人は誓約書に明記して曰ふ『要は右の四綱領を奉じ、神人交通の靈的經驗即ち心證あるものは道會員の資格を有するものとす』と。然らば先づ問ふべきは、自己に其道會員たる資格を有するや否や即ち是れなり。

第二は修德なり。宗教の本領が靈的經驗に在ることは、最早や爭ふ餘地もなし。宗教は宗教にして道德は道德なり。其間畫然たる區別を有す。即ち宗教は神と人との交通にして、道德は人と人との關係なり。こゝを以て宗教を稱して超倫理と謂ふも、敢て差障あるを見ず。然り、然りと雖ども、若夫れ宗教を説くもの、即ち神人交通の秘義を味ふと稱するものにして、終に倫理を離れ道德を無視するに至るものありとせば、此れ眞に活ける神と交るものにあらず、此れは空想上のみの神を弄ぶもの但しは野狐禪的の外道に迷ひ入りたるもの、若くは猥りに廣大無邊なる事をのみ考へることが嗜好で遂に大に悟りたるかの如くに、自己を騙し居る痴漢のみ。若夫れ常に神と交りつゝありと稱するも、其心治まらず、其の德進まず、義を聞て移らず不善を知て改めず、何人より之を見るも、實につまらぬ卑き人なりとせば、其の交神の業たる毫も世道人心に關せず、又た其人の人格に影響を與る少きを以て、吾

人は之を山伏と一般視し、極めて低き尊敬を此人に拂はんとす、而して畢に我徒にあらず。是故に我等道會員たるものは、啻に信神の部に於て、靈的經驗の人たるのみならず。又た心身の鍛練に心を致し、孔子の如く六化し、莊子の如く九進し、どこまでも德を修めて以て我人格を練り上げざるべからず。左らば我が講演に於て、道德を述べ、倫理を講ずるが故に、畢に宗教的團體たる能はずと謂ふ如きは、抑々外道的觀察より來る誤見のみ。吾人は斷じて山伏的宗教家たるべからざる也。

第三は愛隣なり。愛隣は事業なり。我道會員は、啻に一個人として愛隣の行爲を怠らざるのみならず、かねて此主張の爲めに、社會事業若くば國家事業にも挺身努力すべき責務を有す、卽ち團體を組織するゆゑんのもの、主として茲に存す。然に團體を組織して、茲に圓滑に事業を運ばんことは、極めて日本人の不得意とするところなり。見よ政治界と云ひ、教育界と云ひ、實業界と云ひ、何れの處にも協同一致の精神を缺ぎ、甲抵乙抗、左支右往、到るところに統一を見ず、少しく頭を擡ぐるものあらば、則ち直に陷擠せられ、鵬龍將に搏騰せんと欲すれば、風雲嫉んで之を載せず、是れ日本今日の狀態なり。西洋人は個人的なり、獨尊的なり、平民的なり、然れども自ら好んで人を推し、之をして可成其の能力を發揮せしめ、擧げて以て團體若くは國家に貢献せしめんとす、こゝを以てリンコルンあり、ピットあり、ムーデーあり、スポルジョンあり、若夫れ彼等をして今日の日本に生れしめなば其の畢に爲す能はざるや請合ひなり。左れば我道會員は、大にこゝに警惕するところあり、此道會と云へる一團體を起し、之をして愛隣

の大業を爲さしめんには、互に服し、互に從ひ、互に忍び、互に耐へ、虛心坦懷無己無名無功の心を養ひ、一致團結の力を强くし以て、天下萬世の間に我主張を貫かざるべからず。思ふに今後の日本の消長は、かの自尊と此の服從との二者を善く調和し得るや否やに依て決せらるべし。左れば我道會員たるものは、泰西人種と其社會の組織に鑑み、我國人の缺陷に注意し、先づ我が道會員より其好模範を出さゞるべからず。卽ち道會員となりたるもの、心得は蓋し是れなり、曰く凡そ道會員の道會に連なるゆゑんのものは、己れ一個の信仰若くは修養の爲めのみにあらず、此道會と云へる團體を益盛大にし益々强固にし、由て以て共に與に愛隣の大事業を天下萬世の間に行ふに在りと。

第四は永生なり。此永生に就ては已に屢々說明するところありしを以て、此に之を復せざるべきも、若夫れ一言の玆に云ふべきものありとせば、曰く我道會員たる者は、以上の三綱領を奉じて之を其身に實行するに當り、決して石火朝露の如き觀念を以てせず、永遠不死の生命を以て、之れに當るべしと謂ふこと卽ち是なり。

嗟呼吾人は『道會』創立以來、屢々繰り返したることを復た繰り返したり、諸君の中にはアラうるさしと言ふものもあらん。小言めきたる說法なりと呟くものもあらん。よく分て居ると早合點するものも之れ有らん。然れども余を以て之れを見るに、まだ〳〵分て居らぬなり。皆其好むところに於ては分て居る、卽ち一方ばかり分て居ても、四綱領を通じて善く分つて居るものは多からず。信神に重を置くものは純宗敎ばかりを主張して、修德と愛隣の業を低しと觀じ、修德に重きを置くものは、信神の部を空想視し、

愛隣に重きを置くものは、信神修德の如きは舊宗教に屬す、我等新宗教を鼓吹するものは、大に國家社會の中に突き入らざるべからずと稱し、互に己れを思ふて人を思はず、動もすれば相分れて相爭はんとするの傾向あり。於此乎吾人は大にこゝに注意し、決して不具の會員とならず、其靜座するときは、神と交りて餘念なく、其反省するときには、常識の養成より聖學に及び、其愛隣の大業に當るときには劍を提ぐるも亦た辭せずと云ふ大勇猛心を奮ひ起し、其死に際しては、神に感謝し、顧みて友人に謝し、悠々然として靈界に行くべき完全なる人格となるべきなり。嗟吁道會員の資格は夫れ斯くの如し、一躍にして之を得ること難しと雖ども、君子の道は遠に行くが如く必ず近きよりす、高に登るが如く必ず卑きよりす。吾人不肖と雖ども奮起一番、よろしく斯覺悟を以て進むべき也。

宗教上の智情意

凡そ人事には、智情意の三ツが相調和して進まねばならぬ。宗教に於ても亦た同じく然りである。

宗教の信仰上、もし智識が缺乏して居るか、又たは間違つた智識に導かれて居ると、ソレは悲慘目に遭ふものである。有名なる某君は約翰傳の講義が得意であつた、又たキリスト教の眞髓は、此書に限ると確信して居た。然るところが、其後カイムの約翰傳を讀み、又た色々研究の結果として、約翰傳はキリストの直傳ではない、希臘の哲學を含んで居る後世の作であると分るや、其失望

は非常なもので、根が正直だけ其れだけ、いよ〳〵悲慘に見へた。更に他の先輩某君も嘗て我輩に向ふて、「ア、キリスト敎に騙された、狐に拉た樣な目に會つた」と云はれたことがある。孰れも皆誤つた智識の爲めに馬鹿を見たのである。キリスト敎は神學ばかりではない、其他種々なる人生の必要物を含んで居る。其故に智識上に礙くと同時に其一切を棄てゝ仕舞ふといふのは、性急な淺墓な仕方である。然し我輩の記憶する先輩諸氏のキリスト敎を止めたのは、多く其智識の間違つて居ることを發見したからであるらしい、否人事ではない、我輩も隨分悲慘目に遭つた一人である、而して終に今日の如き宗敎を唱道する樣になつたのである。ソコで今日のキリスト敎信者の中にもまだ耶蘇を聖靈で孕んだ奇蹟的の子であるとか耶蘇の購罪によらずば、何人も救はれないとか、聖書が特別絶對なる天啓の書であるとか、耶蘇が唯一の宗敎的自覺者であるとか、など、言つて說敎して居るものを見ると竦然とする。救世軍の事業は結構である、大贊成である。然し其說敎を聞くと、悲しくなる、田舍傳道師の熱心には敬服する、然し其の事實でないことを事實の如く論證して說敎して居るのを聞くと、哀れになる。其れは嘘言を吐て居るからである。而して其を聞て信じたものは早晩礙くに極つて居るからである。尤も某々君や某々君の樣な學者でありながら、尙ほ舊說を維持して居らるゝ方もあるから、一概には云へないが、何しろ學究の大勢には、最早や動かすべからざるものがあるから、烈公も東湖も最早や我を折るより仕方があるまい。其れは兎も角も前述の如く、明治キリスト敎の歷史には、悲慘極まる智識上の大失敗を示し、其戰場に

は死屍累々と横はり、目も當てられぬ次第であるから、今後宗教を信ずるものは、再び大馬鹿を見ぬ樣、智識的方面に大注意を拂はねばならぬ。

情

智識ばかりでは宗教にならぬ、之れに情が伴はねばならぬ。獨逸流の普及福音派や、舊來のユニテリアンや、新佛教派などの如きものでは、宗教にならぬ。學說としては立派なものであるが、宗教としては不具である。ソコで我輩は歌や、樂や、祈禱や、讀經や、總て宗教的儀式と禮拜とを重んずるのである。此れは理屈でなく、宗教の情的方面を養成したく思ふからである。例へば神は父であると云ふことを知つて居る、然し知つて居るばかりで、祈りもせず、感謝もせず、交はりもせぬから、一向其情が通ふて居らぬ信者が幾等もある、其れでは親子は名ばかりで、他人同樣になつて仕舞ふ。例へば久しく里子にやられて居た子は、其父に會ふて、此れが眞の父であると知つても、親しくも、有難くも、嬉しくも何んとも無い想であるが、其れではつまらぬ。ソコで我輩は宗教の情的方面を八釜敷云ふのである。宗教の難有處は議論でない、理屈でない、學究でない、花を見る如く、月を眺むる如く、慈母に懷かるゝ如く、嚴父に教へらるゝ如く、常に神の膝下に侍して、其恩寵を受けて居ることを自覺する感謝的生涯に在るのである。否、時としては感謝ばかりでなく、大に神の怒に觸れて酷い折檻に會ふこともある、又は浮調子で好氣になつて居ると忽ち事件出態して、俄かに悟悔の涙を流す如き場合もある、然し何れも神と父子の關係を有して居る證據であるから、有難い事限

りないである。嗚呼誰れか此の有難き宗教的情味を有するものぞ、否、此情味を有せざるものは宗教者にあらず、彼れ徒に宗教を說くもの、信仰を議するものゝ如きは、宗教に於ては門外漢のみ、宗教の眞髓は、不可言不可說の情致に在りと知るべきである。

意

宗教の眞髓の情致に在ることは言ふまでもないが、然し又智と意を無視する情熱を賴むに足らぬ人あり曾て阿彌陀を信じ、其慈悲心に感激し來るや、殆んど手の舞ひ足の蹈むところを知らず、一時大狂熱を振つて居たが、須臾にして其の熱の褪め來るや恰も枯草の燃へし跡の如くになつて仕舞つた、ソコで智で以て能く其信仰を導き、情で以て其智を誠にし、而して其次には意で以て其智と情とを人事百般の上に活動して行かねばならぬのである。

さて智は物の終始であるから、之を輕視してはならぬ、又た情は人の生命であるから、徒らに之を盲目視してはならぬ、然し意は此の智と情とを率ひて、萬事を遂行してゆくものであるから、先づ人心中の將軍である。學者敬すべし、神秘的預言者尊むべし、然し物事を講義するばかりでは人が動かぬ、高く深く宗教を味ふて居るばかりでは、事業が出來ぬ。殊に智と情とばかりで、意志の之れに伴はぬときは、理屈と狂熱のみ逆發して、其人の言論や、行狀には、案外なる弱點を暴露し來るものである。信神修德愛隣永生の四綱領は承知して居る、實に此四綱領は、萬古不易の道で、此れならば解る、此れならば奉ずる、而して此くの如き簡明不拔の敎でなければ、今日の人心を服させることが出來ぬと云ふて道會員となる。然し其四綱領の實行が、容易の業でないのであ

る。朝起には七ッの德があると聞き、よろしい、我れは之を信ず、之を奉ずと誓言して、さて翌朝より此れが實行にかゝる、スルと一日や二日は大奮發して、早く衾を蹴て起きもするが、何分多年の朝寢の癖が、ソンナに急に取れるものでないから、又々何かと理屈を附けて、元の木阿彌に還るのが常である。朝寢の如き小事すら然り、況んや四綱領を實行する如き大事業をやだ。ソンナに急に思想や感情通りに行くものではない。然し智と情ばかりで、考へたり、感じたりする人は、動もすると之を考へるや否や、之を感ずるや否や、直に其の實行が出來るものと心得るから、劍呑で堪らない。其れは速斷の結果として、之を實行して居ない癖に、之を實行して居るもの丶如くに自惚れたり、偶々眞面目になると、其實行の存外に六ケ敷を悟り、畢に疲れて止めて仕舞ふからである。其故に吾人はどこまでも、此意志を養ひ己が心田を鍛へて行かねばならぬ、耶蘇が天國を芥子に譬へたのも、其徐々に生長すべきを云ふたのである、孔子が六化を述べ、莊子が九變を說くも、皆此意志的鍛練の道程を謂ふたのである。

左らば我道會員たるものは、決して不具的宗敎家たることなく、智情意の三者、卽ち我心の總體を天地人の三界に活躍せしむる樣な健全なる宗敎家とならねばならぬ。

大正元年八月十六日印刷
大正元年八月十九日發行

著者兼發行人　松村介石
東京府下荏原郡入新井村字不入斗八三〇

印刷人　飯島省一
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　天心社
東京府下荏原郡入新井村字不入斗八三〇

道

松村介石主幹

道會の主張は此の雜誌によりて知ることを得べし

（毎月一回一日發行、一部郵税共十二錢△東京府下大森向町天心社發行△振替一九三六七）

道話

松村介石主幹

道の會の主張は此の雜誌によりて知ることを得べし、平易にして趣味ある實踐道德奬勵の雜誌（毎月一回一日發行△東京市芝區三田一の七、間島信雄氏方道の會にて發賣△振替一三四四七）

終